

移行対象と児童文学 I

井原 成男

移行対象というコトバを最初に使いはじめたのは、イギリスの児童分析医であるウイニコットという人で、一九五三年に書いた「移行対象と移行現象」という論文からです。彼はまた、小児科医でもありません。彼は、幼児が肌身離さず持ち歩くもので、それがないと、ひどく不安になる、ブランケット（日本ではむしろタオルケットが多いのですが）そういう毛布だ

とか、ぬいぐるみ、人形などの無生物を移行対象と呼びました。

児童文学の中には、この移行対象がたくさん登場します。ここではその中から最もポピュラーな三つの物をとり上げます。最初は「ジェインの毛布」で、一次的移行対象の好例です。二番目は、おなじみ「くまのプーさん」。これは二次的移行対象の例です。児童

文学の中に登場する頻度が最も多いのも、このぬいぐるみたちです。最後の三番めの物語は「ジェシカ」です。これは空想のお友達との登場する物語です。

「ジェインの毛布」と移行対象

アメリカの劇作家アーサー・ミラーの書いたものに、移行対象への執着とそれからの卒業をテーマにした「ジェインの毛布」という作品があります。これは劇作家として名声を博したミラーが、初めて子どものために書いた物語です。毛布（ブランケット）といえは、アメリカで最も人気のある、おなじみのチャーリー・ブラウンのピーナツブックに登場するライナスも、ブランケットに執着していました。ミラーもまた、初めて子どものために書いた物語に、毛布に執着する子どものことを書いたというのですから、こうい

う行為はアメリカではポピュラーな現象なのでしよう。しかしこの物語は、日本の子どもたちにも大変訴えるところがあるのでしようか、私が図書館で借りた本も、多くの子が借りるということです。大変人気のある物語で、一九八七年版ですでもう四十七刷と書いてある、広範に読まれている本です。大人の作家が子ども向けに書いた作品は、がいて子どもにはそれほど読まれないことが多いのですが、この物語はそうではない、なにかとても子ども心に響くものがあるようです。

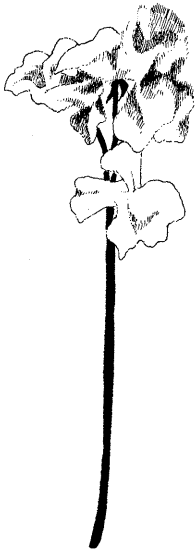
物語の粗筋を見ながらいくつかの特徴をみてみましょう。

主人公ジェインは赤ちゃんの頃から、それがあると安心して遊んだり、眠ったりできるピンクの毛布を持っていきます。（ジェインは自分でそれに「モーモ」という名前をつけています。ウイニコットがいうように、この毛布は自分で選択し、名づけたジェインの創

造物です。それは、「ふんわりして、あたたかい、あかちゃんもうふ」で、人生最初期の、理想的な母親を象徴するものです。彼女はベビー・サークルに入れられると泣きますが、このモーモを渡されるとピタリと泣きやみ、すやすやと寝てしまうのです。モーモは母親との分離の時間を埋めるものとして機能しています。

この本の挿絵をかいたアル・パーカーという人は、アメリカで最も有名なイラストレーターで、子どもの挿絵の仕事を多くしている人のようです。私は偶然この人のある記録映画で見たことがあります。ピートルズのメンバー、ジョン・レノンがオランダのヒルトン・ホテルでオノ・ヨーコとベッド・インをして、たくさんの人と論争し、平和を訴えた映画です。ベトナム戦争が泥沼化し、アメリカ国内を問わず世界中で反戦運動が高揚していた、今から二十年前の出来事です。ジョン・レノンの記録映画「イマージン」を見る

と、論争相手の一人としてのアル・パーカーさんが登場するのです。常識的で、物すごく人のよさそうなおじさんという出で立ちです。結局彼は、「お前さんたちの反戦の主張なんかわからん、それにあんたたちの撮ったヌード写真は、見るに堪えない恥さらしなものだ」とジョン・レノンとオノ・ヨーコを断罪し、ニコニコと去っていきました。アル・パーカーは、ジョン・レノンに、「あなたの欲しいのは世界の平和ではなく、あなた自身の心の平和なのだ」と言いました。ジョン・レノンが、父に捨てられ（彼は私生児でした）、母にも捨てられ、さらに十六歳でこの母とも死に別れた人、そして決して自分を見捨てない母親を誰



よりも求めた人であったことを考えると、案外このアル・パークアの指摘は当たっていたような気もします。オノ・ヨーコはジョン・レノンにとって、決して自分を見捨てない母親だったと思うのです。まるで、ジェインが決して自分を見捨てない理想の母親との安らぎを毛布に象徴させたように、ジョン・レノンは理想の母親との安らぎを、オノ・ヨーコとのベッド・インに象徴させたのです。

ジョン・レノンがオノ・ヨーコとの付き合いを経て、ラブ・ソングを歌うビートルズから脱皮していったように、ジェインも毛布から離れ、一人で出来ることが増えていきます。そして一人で出来ることが増えるにつれ、毛布を忘れる期間もでてきますが、なかなか捨てられないのです。面白いのはジェインが目だって大きく成長する時期にかぎって、もう忘れていたはずの、毛布のことが変に思い起こされるといふことです。毛布は彼女の幼い時と、そこからの成長を思い起

こさせる大切なものです。

ジェインは母親から、「あなたはもう赤ちゃんじゃないんでしょ。あれはもうポロポロになって使えませんよ」とさとされても、頑固に大騒ぎして諦めません。そしてポロ布袋から母が取り出してきた毛布、今ではもうジェインを包むことができないうらい小さくなった（というより、本当はジェインの方がすっかり大きくなったのですが）、その毛布の上に寝て、自分が成長したことを確認するのです。そしてジェインは母親に、「モーモがちいさくなったのは、あたしがおおきくなったからよね」と確認するのです。

こういうプロセスは、臨床的に見てとても重要です。例えば、思春期の心性を理解するのにとても重要なのです。思春期の子たちは、私たちに對して独立を主張し突っ張ります。誰の助けもいらないと突っ張るのです。けれどまた思春期の子ほど見かけとは裏腹に、誰かに依存したがつているものもありません。こ

の矛盾そのものが思春期心性の特徴といえます。こうした心性について熟知していると、思春期の子への治療はとてやりやすくなります。私たちが一つの家を離れ、次の家に引越そうとするとき、それまでではなくでもなく当たり前と思っていたものまで急に懐かしくなり、その大切さが急に強く感じられるのと同様に、次の時期への飛躍の時であるからこそ、逆説的に私たちは、過去のものにこだわり、以前のものを自分ばかりと体験してきたか、そしてそれは欲しくなればいつでもまた手にいれることができるものなのか、あるいはもうそこから卒業していいくらい、それは自分のよき思い出として内面化されているか、そういうことが問われるのです。

過去の毛布にこだわるジェインも、次のステップに向けて、そうした自分の成長にたいする確認のプロセスを通過しているところなのです。このプロセスは決して省略できるものではありません。それは思春期の

嵐（疾風怒濤）が、決して省略されてはならないのと同じことです。

やがてジェインが毛布から卒業する日がやってきます。今ではハンカチほどに小さくなった毛布を、母親に出してもらったジェインは、もうこの毛布を掛けて寝るわけにはいかないのだと悟ります。ちなみに母親は、この毛布がジェインにとっても大事な意味をもつものであると直観的に気づいています。そしていつでもジェインの求めに応じて取り出せるように保管しているのです。これはとてもいい対応だと思えます。その子の大事な物をとっておくことは、その子の大事な心に、居場所を与えていることだからです。

ジェインはポロポロの毛布を窓べに置いておきます。次の日ジェインは、小鳥がその毛布の糸をほぐして一本ずつ、自分の子どもを育てる巣作り用に運び始めている姿を発見します。ジェインは驚いて父親と母親を呼びに行きます。かけつけた父親はジェインに、

毛布が鳥の巢に必要であり、それがあれば生まれくる赤ちゃんが巢の上で暖かく暮らせるのだと教えます。さらに、ためらうジェインに「ジェインだって嬉しくないかい？ あかちゃんのときました。もの、ひとに ゆずれるくらい、おおきくなったんだから」

と話し、次のように言いきかせるのです。「ジェインが もうふのことを おもいだすと、もうふは、また、ジェインのものになるんだよ。」

これは、まるで内（面）化を文学的に表現しているように響きます。

アーサー・ミラーには、「セールスマンの死」という彼を代表する有名な戯曲がありますが、この作品も父親と子ども（息子）の世代継承の物語です。子どもがどんなふうに父親を尊敬し期待するか（あるいはその期待が裏切られるか）、父親は自分の生きざまをどんなふうに子どもに見せるかという物語なのです。ア

メリカの父親には、子どもにとってフレンドリーな立場で、よき道標になるべきだという、根強い伝統的な考え方があろうです。ジェインの父親もまたジェインに、他者としての小鳥たちにどう振る舞うべきか、そして成長とはどう振る舞うことなのかを、アメリカの伝統にしたがって教えているのです。

この作品が出版されたころ、ウイニコットは、まだ生きていましたので、この本を読んでコメントしています。彼は、この物語のような終わり方は感傷的な解決法（卒業）であり、子どもの事実にあわないと批判的です（「遊ぶ」と現実）。

ウイニコットは、解決の仕方が現実の子どもの観察に基づくものではなく、大人であるアーサー・ミラーが考えた感傷的な解決法であって、実際の移行対象からの卒業とは違うと言いたいのだと思います。私は卒業の仕方が感傷的であるというよりはむしろ、自発的でないとといった方が、より適切ではないかと思いま

す。実際に観察してみるとわかりますが、子どもたちは決して人からさとされ、納得して移行対象から卒業はしません。子どもたちは、自分たちに必要な間ほんなことがあっても移行対象から卒業することはないのです。逆に、必要でなくなると実にあつざりと、あんなにも大事にしていた移行対象を、まるでボロ布のように見捨てて振り返ることもありません。

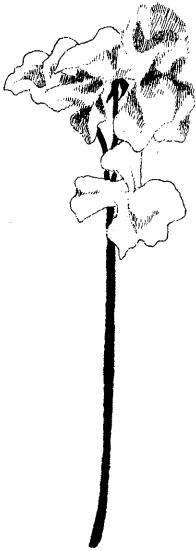
しかし、卒業のさせ方がやや現実からはなれてしまったとはいえ、アーサー・ミラーは子どもの一次的移行対象を驚く程よく観察していると思います。

移行対象と「クマのプーさん」の世界

オランダの作家ブルナーの作品「うさこちゃん」シリーズの中に、クマのぬいぐるみをもらう場面がでてきます。クマのぬいぐるみは欧米において、とても

ポピュラーで、道端でも売っているそうです。これは、私たちに、テディ・ベア、そしてテディ・ベアを原型にしてつくられた、あのクマのプーさんのことを連想させます。これから、クマのプーさんについてみていきますが、クマのプーさんこそ、まさに、ここでずっと取りあげてきた、移行対象のもっとも見事な例です。

クマのプーさんについていく場合、私たちは、プーさんの物語のみでなく、登場人物であるクリストファー・ロビンと、作者でありロビンの父であったミルンのことも考えていく必要があります。クマのプーさんの原型であるテディ・ベアというのは、どんなク



マなんでしょうか。

このクマが、どうしてテデイという名前になったかというところ、エピソードがあります。アメリカ二十六代大統領のルーズベルト（一八五八―一九一九年）の愛称テデイにちなんで、つけられたのです。彼が狩猟中あまりにもかわいいので、子グマの命を助けた、それでテデイのクマ、テデイ・ベアというようになったというのです。

ところで、ミルンの児童詩集である「ぼくらが小さかった頃」にテデイ・ベアがでてきます。この詩集がでたのは一九二四年で、「クマのプーさん」の二年前です。この頃はまだ、クマのプーさんにはなっていない、ただのテデイ・ベア（ぬいぐるみ）です。同じ詩集の中に、「階段の途中で」という詩が、でています。この詩集のあと、第二詩集として、ミルンは一九二七年に「そして、ぼくらは六歳になった」という詩集をだします。ここでは、テデイ・ベアは消え、

プーが登場し、もうほとんど、プーさんと呼んでいいクマを抱っこしています。ここでは、生きたクマとして、ロビンの友人になっています。ぼくたち二人、もう大の仲良しの二人、生きた二人として、つきあっているのです。挿絵に付けられた詩句に「プーという名前がでてきます。「ボクがいるところには、いつもプーがいる」とかいてあります。涙ぐましいくらいの親友になっているのです。

ミルンの息子のクリストファー・ロビン、つまり実生活のロビンはどんな子どもだったのでしょうか。ミルンは、自分の息子がテデイ・ベアと遊んでいる様子を見て、「クマのプーさん」の物語を空想していきました。したがって、この問題をぬきにすることはできません。

テデイ・ベアとクリストファー・ロビンが映っている肖像写真を見ると、後ろにいる女の人はロビンの母親だと誰もが思う。しかし、これは、母親ではない。

ナニーといひまして、乳母と看護婦の役目をして、子どもを母親に代つて育てる人です。この頃のイギリスの上流階級の人は、自分で子どもを育てない。(移行対象の提唱者であるウイニコットにも、大切なナニーがいたということです。ウイニコットの父は商人として成功し、市長に二度も選ばれた人ですが)、成功した作家の息子たるロビンもそうでした。割とかわいそうな子です。彼は、このナニーにとでもなつていて、夏、海水浴に出かける時も、ナニーが行かないのなら行きたくないと言っています。彼自身のちに自伝の中で「私は、どこまでもナニーの子で、九歳までそうだった」と書いています。この人は、しかし、彼が九歳の時、結婚してミルン家を去ります。この年彼は寄宿舎に入るので、ロビン自身、ナニーは母のように大事で何でもしてくれる人であった。そして(ここが大切なところですが)、クマのぬいぐるみは、そのナニーの代わりだったといっています。決して母親の

代わりでなかったというところがロビンの二重に悲しいところだと思ふのです。ロビンの母親からの自立はさぞかし大変だったろうと思います。

ところで、クマのプーさんの物語世界の中で展開されるテーマはどんなものでしょうか。

それについては次号で、見てみることにします。

(お茶の水女子大学)

参考文献

井原成男『ぬいぐるみの心理学』日本小児医事出版、一九九

九年